

待兼山俳句会

第六百八十三回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子
東中乱・向井邦夫・森茉衣

令和六年一月十五日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時半

出席者

瀬戸幹三・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠・東中乱・東野太美子
向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者

山戸暁子・植田真理・碓井遊子・草壁昂・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江
西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

出席者十一名+投句者十一名 計二十二名

兼題

松納・寒椿（幹三） 大寒・春著（暁子）

当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和六年二月十九日（第三月曜日） 会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

兼題 寒明・野焼く（幹三） 草萌・冴返る（暁子） その他当季雜詠

選者吟

大寒の雨に黒ずむ松林

幹三

松とれて路地に魚を焼く匂ひ
手に受けて紅き重さや寒椿

待たせしは春著のせいと謝らる
芸をする春著の猿のよろめける

大寒の石を叩けばきんと鳴る

暁子

・千代紙に席順記す新年会

乱

小さく折られた千代紙を開いて、ここだ、あそこだと言っている出席者が目に浮かびます。千代紙が正月らしい楽しさを出しています。

・松下ろす夫の仕草も老いにけり

かな子

日常のゆるやかな変化には気づきにくいですが、年に一度のことだと違いが分るということでしょう。正月という一年の節目、夫婦ならではの思いがあります。

・けふ人と会ひたくないの寒椿

太美子

枯れた庭の中にぱつと咲く椿。こういう気分、もの言い方がとてもよく似合うと思いました。季語を信じた上での思い切った取り合わせです。

・松納うつし世の音聞こえけり

真理

「うつし世」などとまだ浮世ばなれした言葉を使つているところが正月気分の抜けていないところです。類想句があるのは確かですが言葉の選択がユニーク。

・さきがけの一輪紅し寒椿

瑛三

寒中の枯れの中、意表をつく赤さが目に飛び込んできた、ということでしょう。何度も読んでみたくなる形のいい句です。

・春著広げまづ畳み方教へおく

輝子

着る前からもう「春著」は始まっています。親から子へ。大切に扱われている時間の長さも描かれています。

暁子 選 (後選)

大寒の土を起せば幼虫も

◎大寒や生き物なべて丸く耐へ

あの頃は春著で迎えた嬉しくて

◎寒椿彼方を走る漁船団

コロナ経し熱き合唱寒椿

山行や大寒山を包みけり

大寒の包丁光る厨かな

千代紙に席順記す新年会

大寒やぐにやり重なる猫一二匹

真理

和江 真知子
朱美 真理

瑛三 昴

氣に入りの母の春著をまた借りて

松納行き交ふ老いの送迎車

大寒の風に曝せば菜旨く

小袋にたすき忍ばせ來し春著

寒椿開いては落ちまた落ちる

大寒や声はるかより托鉢僧

◎待合にドリル片手の春著かな

松納いつもの場所に猫戻る

松納樓門阿蘇の復興へ

被災地の毛布いのちの綱となり

◎大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

◎モノクロの大寒鼻に突き刺さる

松納うつし世の音聞こえけり

大寒の空気は棘のあるやうな

小豆粥ついでの汁粉愛づるなり

◎肩上げを下ろす夜なべの春著かな

◎元日の泰平破る午後の地震

春著の子千の階段登り來し

| | | |
|-----|-----|-----|
| 輝子 | 堯子 | 翠 |
| 兵十郎 | 言成 | 眞知子 |
| 恵子 | 茉衣 | 遊子 |
| 幹三 | 盛雄 | 邦夫 |
| 真理 | 安廣 | 真理 |
| 乱 | 安廣 | 邦夫 |
| かな子 | 太美子 | 真理 |
| 輝子 | 兵十郎 | 輝子 |

暁子 特選句講評

・大寒や生き物なべて丸く耐へ

そう言わればそうですね。虫も動物も人も背を丸くして。

・寒椿彼方を走る漁船団

椿はよく海を見下ろす崖の上などに群生している。沖を行く漁船団を見送っているかのようだ。初漁かもしれない。

・待合にドリル片手の春著かな

恵子

もしかしたら間違った解釈かもしれない。病院かどこかの待合室に春著の子が待つている。宿題か、受験子か、そんなところでもドリルをしている。今時の子どもの描写かと理解したが。

・大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

幹三

猿は檻の中でいくつかの群れを作つてかたまつて、温めあつてゐる。そのいづれの仲間にも入れてもらえないなかつた猿かもしれない。揺さぶられた鉄の檻が冷たい音を立てる。

・モノクロの大寒鼻に突き刺さる

邦夫

大寒を色彩で表すならばまさにモノクロだろう。大寒が鼻に突き刺さるとは！大寒の寒さの極限状態を表現された。

・肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子

「夜なべ」は九月の季題。しかしこの句から、歳末の昼間は忙しく、夜、成長した娘のために肩上げを下ろす母親の姿が目に浮かぶ。同じ季節の季重なりは焦点が二つに分かれるので避けたいが、あえて季重なりにして相乗効果を出す場合もある。この句のように他の季節の季題を普通名詞として使う場合はどうだろうか。夜なべは一年中するが、秋の夜長にふさわしいので秋の季題に入っているが、この句の「夜なべ」から秋を想像する人はいるだろうか。出来れば避ける方がよいが、季重なりの許容範囲は各人に委ねられるのではないか。皆さんのご意見をお聞きしたい。

太美子

・元日の泰平破る午後の地震

今年のお正月の記録。世界の戦争、日本の地震や空港事故で明けた今年はどんな年になるのでしょうか。

互選三句

朱美選

大寒の空を旅する白い雲

春著着せ孫の幸せ祈る宮

言成 堺子

春著着た家族写真や幾星霜
どこの家にも幾枚があるはず。共感できる句だ。

瑛三選

松とれて路地に魚を焼く匂ひ

大寒の大氣引き裂く直滑降

幹三

祝ひ菓子懐紙に並べ初句会

幹三 昴 兵十郎

初句会らしい明るく楽しい華やかさを活写。

和江選

けふ人と会ひたくないの寒椿

雀鳴く声に囲まれ松納

大寒や生き物なべて丸く耐へ

天も地も人も寒さに耐える一つの丸い世界感。

かな子 選

松納避難所の灯のまだともる

待たせしは春著のせいと謝らる

けふ人と会ひたくないの寒椿

私の中では椿は乙女心、吉屋信子の七本椿を思い出す。

暁子 太美子

邦夫 選

大寒の大氣引き裂く直滑降

姉に紅少しねたまし朱の春著

大寒の空氣は棘のあるやうな

大寒の空氣には色はなく皮膚や鼻を突き刺す棘がある。

昂 和江

安廣

恵子 選

春著着た家族写真や幾星霜

堯子 安廣

松納心定めて一步踏む

翠 幹三

転ぶなく喉詰めるなく松納

堯子 幹三

妣が餅を喉に詰め一大事。以後小さく切ることに。

言成 選

大寒の風に曝せば菜旨く

堯子 かな子

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

幹三 かな子

手に受けて紅き重さや寒椿

幹三

寒椿はよく落ちるが、手に受けようと成る程重さがある。

堯子 選

人生双六戻る振出なかりけり

翠 かな子

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子 かな子

長生きは幸か不幸か寒椿

かな子 かな子

老いを潔く花を落とす寒椿という季語で表現された。

太美子 選

転ぶなく喉詰めるなく松納

翠 幹三

手に受けて紅き重さや寒椿

翠 幹三

花の鮮やしさと軽さ、その場の人の会話と想像が膨らむ。

輝子 選

寒椿咲く坂一つ一つに名

幹三 かな子

松納これよりルーチンだけの日々

かな子 かな子

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子 かな子

春著の丈を詰めたりのばしたりした日々が懐かしい。

兵十郎 選

手に受けて紅き重さや寒椿

幹三 輝子

朱の春著目元の紅の匂ひたつ

幹三 輝子

松とれて路地に魚を焼く匂ひ

幹三 輝子

松の内は遠慮していた魚焼ができる嬉しさ。

昂 選

モノクロの大寒鼻に突き刺さる

帶見せにくるりと回る春著かな

八十路なるスマホデビューや寒椿

邦夫 幹三 翠

寒椿はご褒美か。

茉衣 選

盛雄 選

尼寺の庭に色添へ寒椿

兵十郎

大寒の青ひろびろと有明海

盛雄

寒椿落ち波乱の年は明けにけり

言成

波乱の年明けが椿の落ちたのに巧みに重なつてゐる。

大寒の空を旅する白い雲
大寒や能登半島の地震悼む
冬椿墓地に明るき大阪湾

墓地の冬椿の赤が大阪湾の大きさを明るくしてゐる。

眞知子 選

安廣 選

松納行き交ふ老いの送迎車

翠

寒椿落ち波乱の年は明けにけり

言成

大寒の包丁光る厨かな

瑛三

凍てつく厨で包丁もその光も冷えきつてゐる大寒の景。

真理 選

遊子 選

けふ人と会ひたくないの寒椿

太美子

寒椿人の話の洩るる窓

幹三

大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

幹三

寒さの中の獸と無機質な音が生々しい。

翠 選

乱 選

芸をする春著の猿のよろめける

暁子

春著召す気力まだまだ旺盛な

太美子

朝春著夕は瓦礫に娘を探す

恵子

惨い現実です。

似た顔にふと振返る春著かな
寒月や荒涼映す谷の水
大寒の雨に黒ずむ松林

安廣
茉衣
幹三

荒涼たる大寒の雨を「黒ずむ松林」で見事に表現した。

言成
かな子

和江

参加者自選句

ふるさとの庭で我待つ寒椿
 大寒の包丁光る厨かな
 冬椿墓地に明るき大阪湾
 長生きは幸か不幸か寒椿
 モノクロの大寒鼻に突き刺さる
 大寒や命救われ白湯一椀
 大寒の空を旅する白い雲
 金ボタン春著を語る夫かな
 寒晴や朝日に映ゆる鬼瓦
 朱の春著目元の紅の匂ひたつ
 松納その青竹で竹とんぼ
 大寒の大氣引き裂く直滑降
 にぎわいがプラットホームに春著かな
 大寒や声はるかより托鉢僧
 大寒やぐにやり重なる猫二匹
 八十路なるスマホデビューや寒椿
 涌水を囲むいのちの寒椿
 松明けて路地の少しく広くなり
 松過ぎて空氣俄かに動き出す
 松取れて門も気持もありふれて

朱美
 瑛三
 和江
 かな子
 邦夫
 恵子
 言成
 堯子
 太美子

句会当日十二時より大阪倶楽部二階食堂にて新年会を開催しました。俳句とは少し離れた世界で和気藹々の中、談論風発して楽しい時間となりました。

今回の句会では震災に関する句が多く出句されました。が、幹二さんから「やはり俳句は体験に基づく事が原則なので、見ていないものを如何にも見て来たように描くのは如何なものか」とのお話がありました。時々俳句を「作ってしまう」私としては大いに反省させられたところです。

待兼山俳句会会費納入のお願い　寺岡 翠

令和六年度の年会費一万二千円をお納めください。

期限は二月末日まで。振込先は左記の通りです。

- ・ ゆうちょ銀行の振込先

記号 14170 番号 20486361 名前テラオカミアリ
- ・ 他金融機関からの振込先

店名四一八（読みヨンイチハチ）、店番 418
 預金種目 普通預金 口座番号 2048636

山田安廣

ひといし